

近代文学研究叢書
第 37 卷

昭和 48 年 1 月 20 日 印刷

昭和 48 年 1 月 25 日 発行

[¥ 2500]

著 者	昭 和 女 子 大 学 近 代 文 学 研 究 室
発 行 者	東 京 都 世 田 谷 区 太 子 堂 一 ノ 七 小 林 寅 次
印 刷 者	東 京 都 千 代 田 区 神 田 錦 町 三 丁 目 一 四 番 地 梶 原 忠 幸
発 行 所	東 京 都 世 田 谷 区 太 子 堂 一 ノ 七 昭 和 女 子 大 学 近 代 文 学 研 究 所 振 替 口 座 東 京 一 七 〇 八 六 七 番 電 話 大 代 表 (122) 五 一 三 一 番

近代文学研究叢書

第三十七卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村 本保 人浜 能成 内辻 玉島 山佐 佐佐 笹佐 坂木 河金 片荻 岡太 上石 石池

田松 間見 勢瀬 井田 伯藤 沢[△]本 鱒子 桐原 田井 森田 田
坂 徳 藤村 宮 木由 俣 井保
澄定 久 円 頼正 幸謹 梅幹 美八 実健 顯泉 三磯 延吉 龜

夫孝 雄都 吉郎 賢勝 瀬鑑 助二 允友 二明 郎修 英二 智水 生郎 吉男 貞鑑

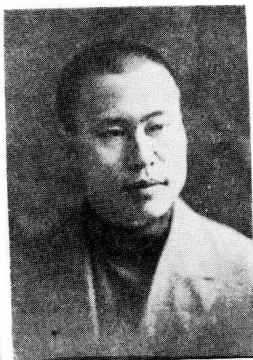
(国語学) (近代文学) (国文学) (近代文学) (美語学) (近代文学) (仏文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (英文学) (和歌文学) (俳文学) (近代文学) (比較文学) (英文学) (児童文学) (国文学) (国文学)

口 絵 写 真

乙	井	中	ブ	エ	土
骨	上	村	ラ	ド	田
三	剣	憲	ム	ワ	杏
郎	花	吉	ウ	ー	村
	坊		ェ	ド	
			ル	・	
			ク		
			ラ		
			ー		
			ク		

土 田 杏 村 (1)

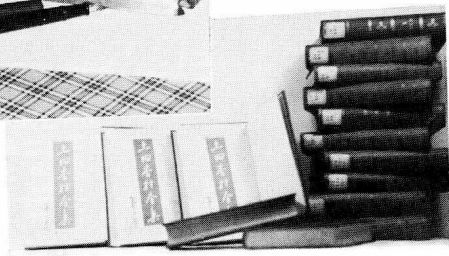
← 杏村肖像



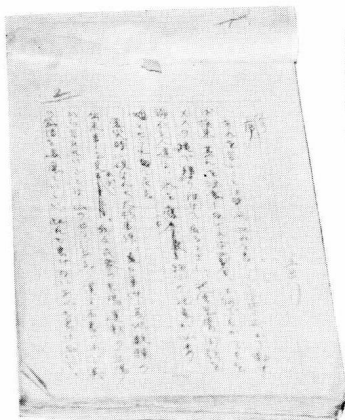
← 「教育の革命時代」(大正十三年一月刊)
その他の著者(土田寛氏蔵)



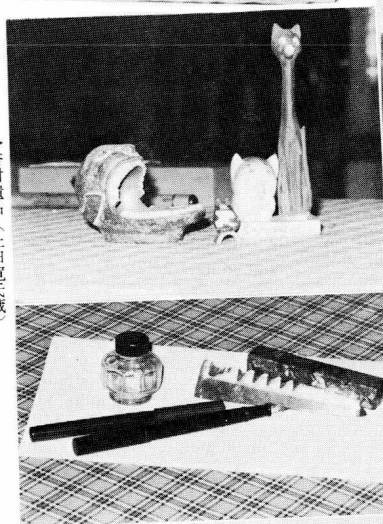
↓ 「土田杏村全集」全十五巻
(昭和十年三月～十一年四月刊)
(昭和女子大学蔵)



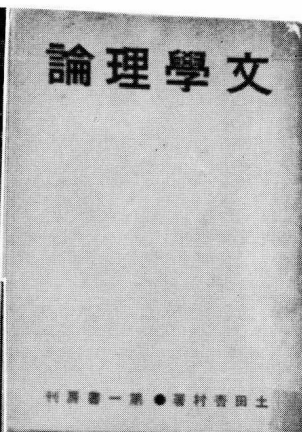
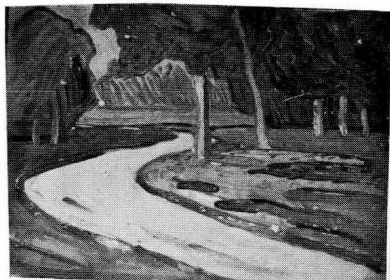
自筆原稿「流言」(土田寛氏蔵)



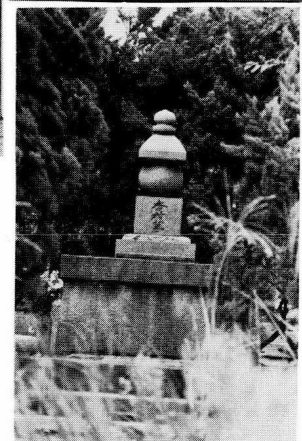
→ 杏村遺品(土田寛氏蔵)



↑ 杏村自筆風景画
(土田寛氏蔵)



「文学理論」(昭和七年七月刊)
(上木敏郎氏蔵)

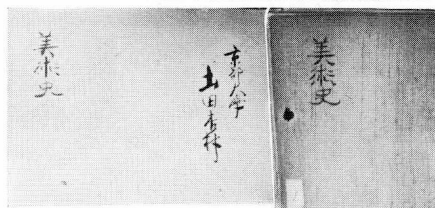


杏村の墓—京都市、智積院



↑ 土田家書庫の一部

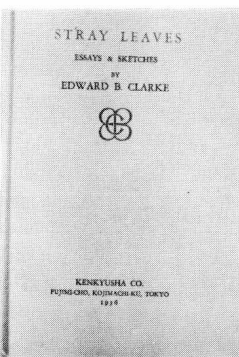
↑ 「国文学の哲學的研究」
(昭和二年十一月〜八年三月刊)
(土田寛氏蔵)



↑ 杏村自筆美術手帖(京都大学時代)
(土田寛氏蔵)

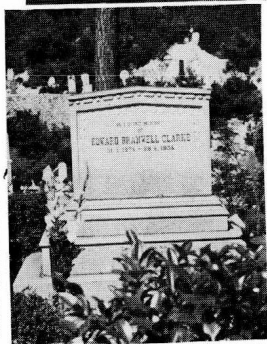
エドワード・ブラムウェル・クラーク

→
クラーク肖像

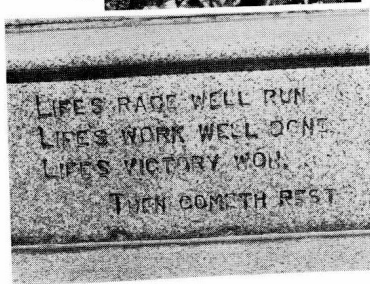


'Stray Leaves'
—essays &
Sketches
—昭和十一年五月刊—
(石田憲次氏蔵)

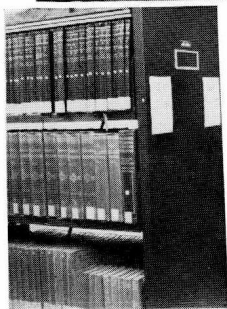
→
クラークの墓—神戸市立外国人墓地



クラークの胸像—クラーク文庫内



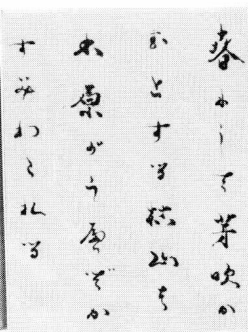
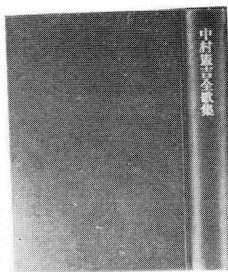
↑ 墓の台石に刻まれた詩



←クラーク文庫の一角—京都大学

中村憲吉 (1)

憲吉筆蹟 →
(中村シツ子氏蔵)

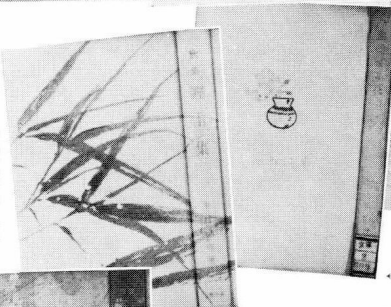


憲吉肖像

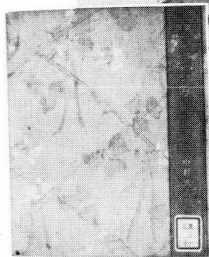
自演歌集「松の芽」—大正十四年五月刊
(昭和女子大学蔵)



→「軽雷集」—昭和六年七月刊
(昭和女子大学蔵)



←「黒鈴薯の花」—大正二年七月刊
(昭和女子大学蔵)



↑「しがらみ」—大正十三年七月刊
(昭和女子大学蔵)

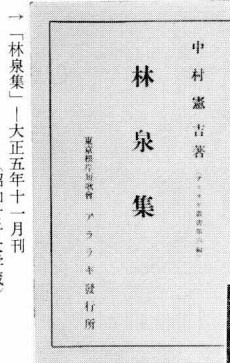


↑ 終焉の地—尾道市千光寺

→「中村憲吉全集」—昭和四十一年八月刊
(中村シツ子氏蔵)

中 村 憲 吉 (2)

歌碑—広島県立三次高等学校内

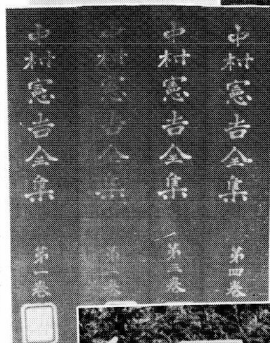


→「林泉集」—大正五年十一月刊
（昭和女子大学蔵）

「軽雷集以後」—昭和九年十一月刊
（昭和女子大学蔵）

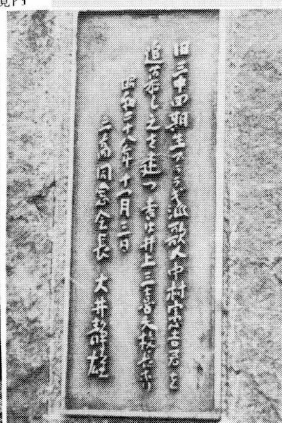


↑歌碑—広島県
真光寺境内



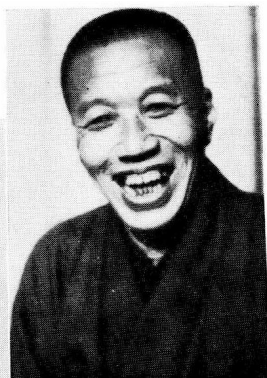
→「中村憲吉全集」四冊—昭和十二年十月
十三年十月刊
（昭和女子大学蔵）

歌碑裏面—三次高等学校内

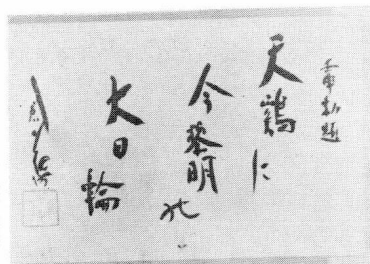


→憲吉の墓—広島県

劍花坊肖像 (大石鶴子氏藏)

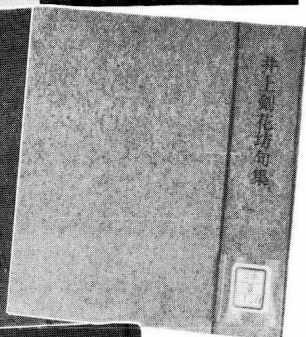


→ 劍花坊の筆蹟 (大石鶴子氏藏)



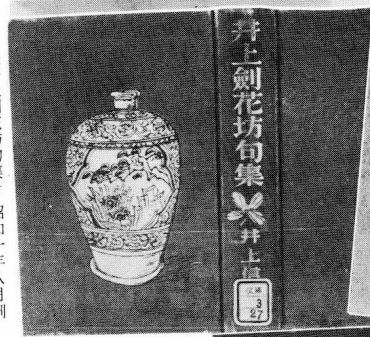
「井上劍花坊句集」——昭和四十二年十二月刊

(昭和女子大学蔵)

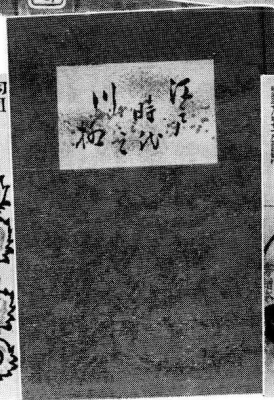
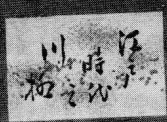


「井上劍花坊句集」——昭和十年八月刊

(昭和女子大学蔵)



雑誌「川柳」創刊号——明治三十八年十一月刊
← (国立国会図書館蔵)



→ 「江戸時代之川柳」——昭和三年二月刊

(昭和女子大学蔵)



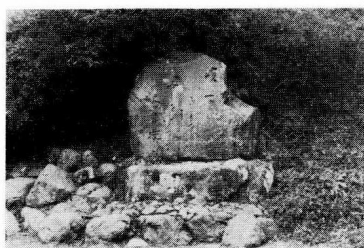
「習作の二十年」——大正十二年四月刊

(国立国会図書館蔵)

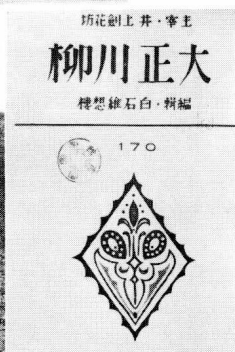
井 上 剣 花 坊 (2)



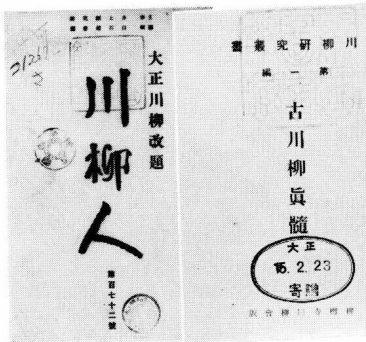
「川柳を作る人に」——大正八年九月刊
(国立国会図書館蔵)



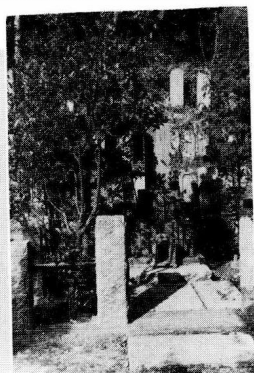
川柳碑——鎌倉、建長寺



雑誌「大正川柳」——大正十五年十一月
(国立国会図書館蔵)

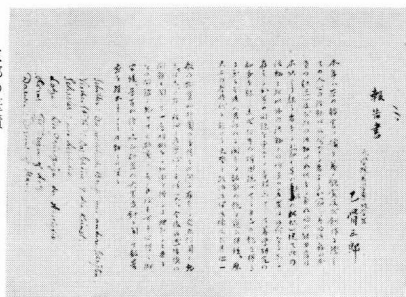


→「古川柳真髓」——大正十五年二月刊
雑誌「川柳人」——昭和二年一月
(国立国会図書館蔵)



剣花坊の墓——鎌倉、正統院

三郎肖像



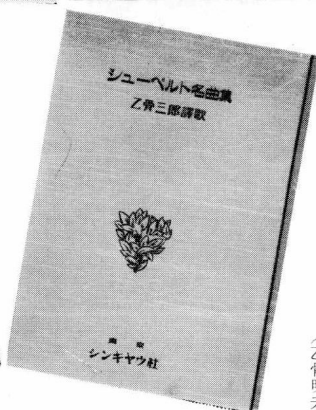
三郎の筆蹟

(乙骨明夫氏蔵)



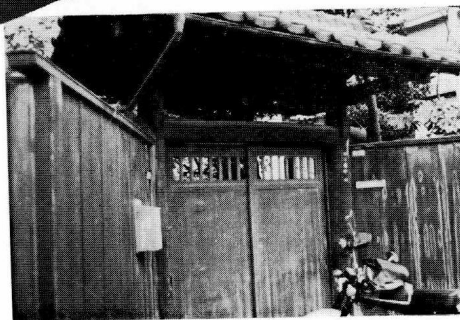
雑誌「音楽」——明治四十三年一月创刊

(東京芸術大学蔵)



「シューベルト名曲集」——昭和十年十月刊

(乙骨明夫氏蔵)

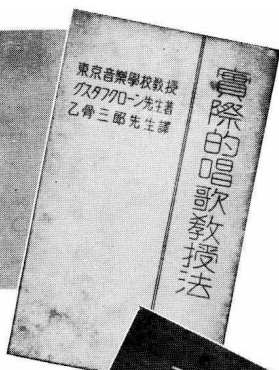


「旧居跡」——文京区大塚五丁目六番地

乙 骨 三 郎 (2)

「實際的唱歌教授法」

—大正十四年八月刊
(国立国会図書館蔵)

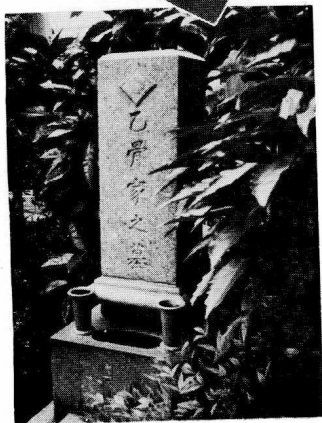


「歌劇オルフォイス」—明治三十六年七月刊

(乙骨明夫氏蔵)



← 乙骨家之墓—文京区、寂円寺



「西洋音楽史」—昭和十年十二月刊

(乙骨明夫氏蔵)



雑誌「音楽」—明治三十八年四月創刊

(国立国会図書館蔵)



「和声楽教科書」—昭和四年七月刊

(国立国会図書館蔵)



目次

口	第三十七卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(一四)
凡	例	昭和女子大学編集室……(一九)
土	田 杏 村	近代文学研究室……(三)
エドワード・ブラム		
ウエル・クラーク	吉	近代文学研究室……(一九)
中	村 憲	近代文学研究室……(四三)
井	上 剣 花 坊	近代文学研究室……(三七)
乙	骨 三 郎	近代文学研究室……(三六)
近代文芸年表	(37)	近代文学研究室……(四三)
卷末付記		近代文学研究叢書編集室……(四九)

第三十七卷の成立

本卷は昭和期第十二卷として、昭和九年四月から同年九月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

土田杏村は哲学者、評論家。本名茂^{つとむ}。明治二十四年一月十五日、新潟県佐渡郡新穂村の豪家に生まれた。新穂高等小学校卒業後は、新潟師範学校、東京高等師範学校と進学し、成績はいつも群を抜いた。新潟師範卒業に際しては新潟県知事より成績優秀品行方正の廉で表賞された。両師範学校では生物学、博物学を専攻したが、このころ田中王堂と相識り、理科専攻によって実証的傾向を培った杏村は、王堂のプラグマチズムの哲学に心から共鳴した。大正三年、本科三年生の秋「文明思潮と新哲学」一卷を処女出版し、卒業後は京都大学の哲学科に入学、西田門下となる。京大在学中は現代哲学に主力を注ぎつつも文学、美術、仏教など広く学び、東京時代に引続き「第三帝国」その他に評論や詩を寄稿した。「生物哲学」「象徴の哲学」「靈魂の彼岸」「文化主義原論」「日本支那現代思想研究」「国文学の哲学的研究」など幾多の著書を出し、自らは雑誌「文化」を主宰、広く青年層の読者を得た。大正十年に信濃自由大学を設立、その教育理想を実践した。宿痼のため病床に呻吟するようになって以来国文学研究に打ち込み、早くより中国との関係に着目し哲学的方法をあみ

出したが、完成を見ずしてたおれ昭和九年四月二十五日京都で永眠、享年四十四歳。その龐大な著書の大半は「土田杏村全集」全十五巻に収められている。

エドワード・クラークは教育者。明治七年（一八七四）一月三十一日、今の横浜市中区山手町に貿易商の父ロバート・クラークの長男として誕生。明治十二年、キリスト教会学校に入学、十九年フランス学校に転じ二十一年ヴィクトリア公学校に入学、ギリシャ語、ラテン語を学ぶ。この間、ラフカディオ・ハーンに英作文の指導を受ける。二十三年卒業と同時に渡米その後渡英、二十九年六月、ケンブリッジ大学を卒業、三十年七月帰日、横浜に住んだ。B・A及びM・Aの学位をもち教育者として英語、英文学をはじめフランス語も教授した。慶応義塾、第一高等学校、第三高等学校、京都帝国大学の他、講師として同志社大学、竜谷大学にも出講した。日本語にも堪能で万葉集などの古典に通じ、広い学識と円満高潔な人格でその一生を日本の英語学教育に捧げ、多くの門弟に敬慕された。他面多読家、蔵書家としても著名で、大正初年頃からは「大阪朝日新聞」「英文学研究」などに主としてエッセイを執筆したが、著書としてはその死後石田憲次氏がそれらを一冊にまとめた「落葉」(Stray Leaves)がある。昭和九年（一九三四）四月二十八日脳溢血のため京都の地で終焉、享年六十歳であった。

中村憲吉は歌人。筆名霧村草堂主人、浮沼影郎、桃の井照枝、はしばみ、火喰鳥、鹿の児島の人など。明治